

琉球大学学術リポジトリ

《英語科》質の高いコミュニケーション能力の育成(2年次)：
アクティブ・ラーニングを取り入れた授業実践を通して

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学教育学部附属中学校 公開日: 2020-06-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山本, 耕司, 上原, 明子, 浦崎, 多恵子, 大城, 賢 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/45995

質の高いコミュニケーション能力の育成（2年次）

－アクティブ・ラーニングを取り入れた授業実践を通して－

山本耕司* 上原明子* 浦崎多恵子* 大城賢**

*琉球大学教育学部附属中学校 **琉球大学教育学部

I 主題設定の理由

1 社会的背景から

中央教育審議会の答申第197号(平成28年12月21日)は、次期学習指導要領の方向性の中に「主体的・対話的で深い学び」の実現を挙げている。これから生きるために必要な資質・能力を育成するには、習得すべき知識の量を減らさずに、「どのように学ぶか」の学習過程をアクティブ・ラーニングの視点で改善し、質の高いものにすべきであるとしている。

また、各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を軸として既に行っている学習活動をこの視点で改善していくこととし、「主体的・対話的で深い学び」は1つの授業で全て実現するのではなく、単元や題材のまとまりの中で実現すると述べている⁽¹⁾。

また、英語科における「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けては、『外国語教育においては、質の高い学びに向けて、学びの過程を、相互に関連を図りつつ、改善・充実を図ることが必要であり、そのような過程で外国語によるコミュニケーションを通じて、自分の思いや考えが深まったり更新されたりすることを児童生徒が認識し、自信を持つことができるような学習活動を設けることが重要である』⁽²⁾とまとめられている。

2 これまでの研究から

本校英語科では、昨年度より「質の高いコミュニケーション能力の育成－アクティブ・ラーニングを取り入れた授業実践を通して－」というテーマで研究を進めている。

研究の成果は、単元を貫くゴールの設定として Big Question と、それと連動した Can-Do リストの取り組みは、思考を深めていく上で効果的であった。アウトプットをする時になって、突然、課題を投げかけるの

ではなく、一時間毎に Big Question に向けて、足場づくりをし、問いに対する答えを常に思考し、時には他者と対話しながら、さらに思考を深めていくことができた。

課題としては、生徒の思考を促す効果のある課題の設定について、さらに研究が必要であるという点である。問いが難しすぎず、簡単すぎず、「考えなくなる」状況や「深く思考する必然性」をどう創っていくのかを、実践を通して考えていく必要がある⁽³⁾。

そこで、今年度取り組む研究は、前年度の課題を踏まえて、深く考えるための単元構想を含めた、アクティブ・ラーニングの視点での授業改善を図り、本校英語科の考える、質の高いコミュニケーション能力の育成を目指す。

II 本研究の目的

アクティブ・ラーニングを取り入れた授業実践を通して、質の高いコミュニケーション能力の育成を図ることを目的とする。

III 目指す生徒像

内容のつながりを意識して、自分の考えや気持ちを、場面や状況にふさわしい表現を用いて伝えることができる生徒。

IV 研究内容

1 研究計画

3年間の研究を以下のように計画している(表1)。研究2年次の今年度は、前年度を踏まえての授業実践

の改善及び学習評価の検討に重点を置き、研究を進める。

表1 3年間の研究計画

1 年 次	<ul style="list-style-type: none"> ・英語科における「思考力」の定義 ・「質の高いコミュニケーション能力」の定義 ・アクティブ・ラーニングを取り入れた授業実践の検討
2 年 次	<ul style="list-style-type: none"> ・アクティブ・ラーニングを取り入れた授業実践の改善 ・深く考えるための単元構想 ・学習評価の検討
3 年 次	<ul style="list-style-type: none"> ・アクティブ・ラーニングを取り入れた授業実践の充実 ・本研究のまとめ

2 アクティブ・ラーニングを取り入れた授業実践の改善

答申を受け、外国語教育では「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方」を働かせる学習過程へ、生徒が次の4つのプロセスを経ることを重視して改善することが求められている。(1) 設定されたコミュニケーションの目的・場面・状況等の理解、(2) 目的に応じて情報や意見等を発信するまでの方向性の決定とコミュニケーションの実施、(3) 対話的な学びとなる目的達成のための具体的なコミュニケーションの実施、(4) 言語面・内容面についての自分の学習のまとめと振り返り。こうしたプロセスは、学んだことが意味づけられ、生徒が既存の知識や経験と新しく得た知識を言語活動に活かし、思考力・判断力・表現力を高める契機となる。ひいては、本校英語科の考える「思考力」が高まり、「質の高いコミュニケーション能力」の育成につながると考える。以下は、本校英語科が取り入れている、それぞれのプロセスにおける活動である。

(1) 設定されたコミュニケーションの目的・場面・状況等の理解

各単元の導入では、その単元の内容にまつわる事前アンケート(図1)を実施し、生徒がどのような知識や情報を持っているかを集計し、全員で共有をしている。また、現実味のある質の高い課題設定に加えて、学習活動の見通しを明らかにし、学習活動のゴールを鮮明に描かせるために、「単元を貫いたゴール Big Question の設定」を行っている。実際の学習活動を展開してい

く際には、「Can-Do check sheet」を活用し、各単元を通しての本質的な問いや、何ができるようになるかなどの毎時間の到達目標の設定・共有を行っている。

Pro.3 事前アンケート		
Class:	No:	Name:
プログラム3では武史とリサが環境問題について話し合っています。 あなたの知っている範囲で、以下の質問に答えなさい。		
①あなたの周りで起こっている身近な環境問題は何か？（		
②あなたがやっている環境汚染対策はありますか？あれば具体的に書いて下さい。（		
③附属中で行っている「3せい運動」における清掃について、あなたはどのように取り組んでいますか？（		
④最も環境汚染対策が進んでいる国はどこだと思いますか？（		
⑤ What can you do to save the earth? (OREO を使って、4文以上書きなさい。)		

図1 事前アンケート(中3 Program3)

(2) 目的に応じて情報や意見等を発信するまでの方向性の決定とコミュニケーションの実施

「Let's talk together」(2人1組で手元に配られたカードを使って Q&A を行う活動)では、自分が答えた後に必ず1文を加えて返答させるようにしたり、相手から情報を引き出すような質問をさせたりしている。また、生徒がその時点で持っている知識や情報を処理して、新しい考えを生成していくためにマッピングをさせたり、論理的な英文を書かせるために OREO Writing (O:Opinion 意見、R:Reason 理由、E:Explanation, Example 説明、例など、O:Opinion 結論)を取り入れている。

(3) 対話的な学びとなる目的達成のための具体的なコミュニケーションの実施

単元末の自己表現活動に向けては、それぞれが書いた成果物(下書き)をお互いに比較・検討し合う、ギャラリーウォーク(列ごとやクラス全体などを見て回り、付箋紙などに感想・コメントなどを記入し貼る)や、ピア・フィードバックシートを用いて、グループ内でアドバイスや良い点などについて述べ合う活動を取り入れている。また、単元末においては、知識やスキルを状況において使いこなすことを求める「パフォーマンステスト」を実施している。単元を通して身に付けた(インプットした)内容について、既習事項と組み合わせで自分の言葉で表現(アウトプット)するという指導の流れを常に意識し、課題を設定している。

(4) 言語面・内容面についての自分の学習のまとめと振り返り

振り返りは、自らの学びを意味づけたり、価値づけたりして自覚し、他者と共有したりしていくことにつながる。振り返りの場面には大きく三つの意味がある。一つは、学習内容を確認する振り返り。二つは、学習内容を現在や過去の学習内容と関連付けたり一般化したりする振り返り。もう一つが、自己変容を自覚する振り返りである。これらについても、「Can-Do check sheet」(図2)における、「Today's Challenge」、「気づき&発見&学び」のコーナーに記入をさせることで、自らの学ぶ姿を具現させている。

⑦	Today's Can Do	できた?	Yesterday's challenge
月	本文で学んだことを中心に、考えたことや体験を5文以上の英文で書くことができる。(感③)		Have you ever repaired things?
日	Today's Challenge あなたができる身近な5Rsって何だろう?		★気づき&発見&学び ◆疑問 ♥感想

図2 Can-Do check sheet (中3 Program3)

3 深く考えるための単元構想

深い学びの実現のために、それまでに学んだことや各教科等で身に付けた知識や技能を発揮・活用する学習場面を頻繁に生み出す必要がある。

既習事項を巻き込んで新出事項の典型的な使用場面や働きを生徒に提示し、経験させていく(インプット)。そして、新出の語彙・文法事項の学習は、使用場面やその働きを実際に体験しながら習得するため、英語で意思疎通ができる範囲を徐々に広げていく(アウトプット)ような授業実践を目指す。

田中(2017)は、「深い学び」を成立させるためには、①課題設定、②思考、③メタ認知、④対話、⑤資料活用、⑥考察、⑦表現、⑧評価という8つの段階からなる課題解決の認知プロセスをたどって学習を進めていくことが大切と述べている⁽⁴⁾。

本校英語科では、先に述べたアクティブ・ラーニングを取り入れた授業実践の改善に加え、前研究から引き続き、知識構成型ジグソー法を取り入れた授業実践を行っている。ジグソー法の授業においては、上記の①から⑧のいくつかの項目を網羅できるような活動が含まれている。教師は、生徒の既習の知識と関連付けながら新たな学習課題を設定(①)し、複数の資料を比較・検討したり、友達の思考と自分の思考を比較してより深い思考を目指すことを促す(②⑤)。対話を活性化させるために、時間制限を加えたり、対話と発表方法の手順を示す(④)。また、課題解決の結果の発表に

あたっては、理由や根拠をつけて話すなどのポイントを意識させながら、内容の練り上げ、推敲に取り組みさせる(⑦)。そして、単元や授業の振り返りでは、学習した言語材料の使用できる場面や働き、題材や言語活動での発見を生徒自身が整理・消化する機会を設ける(⑥⑧)。

このようにして、効果的な場面や教材を、生徒の実態に合わせ、工夫改善し取り入れている。ジグソー法を取り入れた授業実践については、後述の各学年の授業実践を参照していただきたい。

4 学習評価

「資質・能力」を育成する上で一つの鍵となるのは、「何が身についたか」を確認するために学習評価の充実を図ることである。そこで、本校英語科では、資質・能力のバランスのとれた学習評価を行っていくために、パフォーマンス評価を取り入れ、ペーパーテストの結果にとどまらない、多面的・多角的な評価を行っている。なお、パフォーマンス課題の作成においては、西岡(2016)が述べている、①適した題材を設定する(深く理解してほしい重要な目標を扱う単元を選定することが大切)、②「本質的な問い」を明確にする(「どのように書けば/話し合えばよいのか」その単元の「本質的な問い」を探求させることによって、教科の中核に位置するような「原理や一般化」についての「永続的理解」を身に付けさせることができると考えられる)、③課題のシナリオを作る(パフォーマンステストの目的、生徒が担う役割、パフォーマンスの相手、状況、生み出すべき作品、評価の観点といった要素を織り込む)、④指導と学習活動を構想する(指導に当たっては、単元末のまとめの課題としてパフォーマンス課題を位置付けたうえで、その課題に対応できる力を身に付けさせるための指導や学習活動を構想していくことが重要である)の4点のポイントを参考にし、考案している。以下は3学年が7月に行った内容(Writing)である(図3)。

Pro.3のBIG Questionに答えよう!
高校の面接試験で、「悪化する環境破壊を防ぐために、学校でどのような取り組みができるか」について述べることになりました。今すでに取り組んでいることや、今すぐにも取り組んでいけるようなことを例に出し、「あなたのやっている(できる)環境汚染対策」についての英文を書きなさい。(OREOを使って、5文以上)

図3 「5Rs to Save the Earth」(中3 Program3)

①(題材) What can you do at school? (地球環境を守るために)

- ② (本質的な問い) 学んだ表現を使って、考えたことや体験を5文以上の英文で書くことができる。
(OREOを使って、自分の意見を英語で論理的に書くことができる)
- ③ (課題のシナリオ) 高校入試の面接において、今すぐにでも取り組んでいけるようなことを例に出し、環境汚染対策を5文以上書く。
上記内容については、事前に生徒に提示して、教師と生徒で共有を行っている。

V 授業実践

1 1学年実践事例

自分たちが住む地域の魅力についての情報をわかりやすく伝える工夫を考え発信させるという授業実践を試みた。

(1) 主題 Program 7

The Wonderful Ocean

(SUNSHINE ENGLISH COURSE 1 開隆堂)

(2) 目標

ホェールウォッチングの魅力をもALTにスキット発表を通して伝えることを目標とし、単元計画を立てた(表2)。

表2 単元計画

単元を貫くゴール Big Question 「沖縄の冬の海の魅力を伝えよう！」	
学習内容	
第1 ～6時	シャチウォッチングでの会話から、シャチやイルカの生態や表現を学習する。
第7時 (前時)	事前活動:クジラについての説明①及びエキスパート活動:エキスパート活動でクジラについての情報を得る。
第8時 (本時)	ジグソー活動～クロストーク クジラについての情報を整理し、わかりやすく伝える工夫を加えて表現する。
第9 ～10時 (次時)	スキットを作成発表しホェールウォッチングの魅力をもALTに伝える。 事後活動:クジラについての説明②

(3) 本実践の目的

相手に地域の魅力を伝える土台となる表現能力の育成が本実践目的である。グループで協力して沖縄で見ることができるクジラについての情報を整理し、聞き手にわかりやすいように工夫して伝えることができる

ように知識構成型ジグソー法を活用した。

メインの課題

沖縄のクジラについて相手にわかりやすく伝えよう。

期待する解は次の通りである。

期待する解:

Whales are very big. They are about 13m long. They eat 4t plankton every day. They come to Okinawa in winter, from December to April. (地図などを見せながら) They come from Siberia. They raise their babies in Okinawan Sea.

期待する解のAの要素

- ・相手が理解できるような表現を用いて、必要があれば絵や図を用いて説明しようとする。
- ・相手が理解しやすいように伝える順序を構成している。

情報を相手がわかりやすいように伝えるという意識を持たせることで、学年が上がっても常に工夫して英語で表現することができるようにと考え本実践を行った。

(4) 実践内容

① Big Question

単元を貫くゴールとしてのBig Question「沖縄の冬の海の魅力を伝えよう！」を設定し、まずはクジラについての情報を集め、仲間と話し合い思考しながら、それらの情報をわかりやすく伝えるために知識構成型ジグソー法による学習を2時間配当した。その後、そこで学んだことを生かしてホェールウォッチングの魅力をもALTに伝えるスキットをグループで作成発表させた。

② エキスパート活動

エキスパート活動では、各グループに鯨に関する3つの質問カードと答えのカードをバラバラの状態に配布する。エキスパート活動では、質問のカードとその答えのマッチングを行うことを通してクジラについての情報を収集させた。その後、カードから得られた情報を他のグループに伝える際にわかりやすく伝える工夫についても考えさせた。エキスパート資料は次の通りである。

〈エキスパートA〉

鯨の体長、重さ、鯨が沖縄に来る時期についての英文。
鯨の大きさなどを伝える時にできる工夫について話し合う。

〈エキスパートB〉

鯨がどこから来るか、鯨が沖縄に来る季節、沖縄周辺で鯨が何をしているかについての英文。鯨がどこから来るかを伝え

る時にできる工夫について話し合う。

(エキスパートC)

鯨のえさ、食べる量、沖縄周辺にいる時のえさを食べる量についての英文。鯨の情報を伝える時に加えることができることがあるか話し合う。

エキスパート資料の作成においては、期待する解のAの要素に気づく課題を与えるようにした。

③ ジグソー活動

ジグソー活動では、エキスパート活動のグループとは違うメンバーで、グループを構成する。エキスパート活動で確認した情報を共有する時にもエキスパート活動で考えた工夫点を使って発表させた。各エキスパートの情報から伝えたい内容を選び、構成を考え、工夫を加えて発表する練習をさせた。

④ クロストーク

クロストークにおいて、全グループを全員の前で発表させるのではなく、2グループがペアグループとなって一斉にお互いが発表するという形をとり、2グループのみが全員の前で発表した。また、発表を聞いて学んだことや発表をした感想をワークシートにまとめさせた。

(5) 実践の考察

① 授業前後の変容(ワークシートから)

知識構成型ジグソー法の授業前後のクジラについての説明を、ワークシートの記述をもとに比較する。以下は、3名の生徒の変容である(表3)。

表3 原稿(授業前後)

生徒	授業前後の生徒の記述(原文ママ) 下線は授業者
生徒A	【事前】 Whales come from Zamami. Whales is so big!
	【事後】 Whales come to Okinawa in winter from December to April. They raise their babies there. Whales are 13m <u>and</u> 30000kg. Whales eat plankton and small fish. They eat 4000kg every day. <u>But</u> they don't eat so much in winter. 【発表の際工夫した点】 絵を実際に見せながら説明する。ジェスチャーもして伝わりやすくする。大きな声でしゃべる。
生徒B	【事前】 Okinawa whales beautifor. Whales live Zamami ocean. Whales sometimes jump.
	【事後】 <u>Hello</u> . Whales live Zamami Okinawa. They usually eat plankton and small fish. <u>But</u> whales don't eat in winter. Whales sometimes jump

beautifully. Thank you.

【発表の際工夫した点】

声をはっきりし、文の構成を考える。絵を使いジェスチャーなどをやる。つなげる文が少なかったので反省。

【事前】

Whales is very big. It lives in osyeam.

【事後】

生徒C
Whales are 13m about long. They are 3000kg. They eat small fish and plankton. Whales eat 3000 kg. They come Okinawa. They are interesting.

【発表の際工夫した点】

クジラの特徴などはジェスチャーを用いて発表した。聞いている人にできるだけ問いかけをした。

クジラについて説明できることは、事前活動では big などのイメージを書いている生徒がほとんどであったが、事後活動は具体的なことを表現できるようになっており、文の数も増えている。また事後活動では、挨拶や文をつなぐ接続語を使用する生徒もいた。

② 授業デザインの振り返り

発表の様子を観察するとどのグループも聞き手を意識して、わかりやすい発表を心がけている様子が見られ80%の生徒が「発表で工夫することができた」、20%が「少しは工夫することができた」と回答していた。クジラの大きさを伝える工夫については、クジラの絵を描くことを想定していたが、体長や重さを他のものと比較する絵を描いている生徒も予想以上にいた。ほとんどのジグソーグループで、伝える情報を取捨選択し、伝える順序など考えて文章を構成することができていた。エキスパートで与えられた情報だけでなく、あいさつを入れたり接続詞を用いて文をつないでいるグループもあった。

グループでの話し合いや他のグループの発表で自ら気づいたことは、ジグソー課題後のスキット発表の際にも、わかりやすく伝える工夫としてすべてのグループで実践されていた。

③ 実践を踏まえた授業の改善点

課題設定

ALTに冬の海の魅力を伝えるという課題設定であった。生徒は工夫をして英語で表現していたが、生徒自身が本当の魅力を感じ、伝えたいという気持ちをもっと持たせる課題を模索していきたい。生徒が伝えたいような内容を準備したり、生徒自身から課題を引き出すことにも取り組んでみたい。

英語運用能力

わかりやすく伝えることは発表する際に英文を間違

えずに言うことだと考え、作成した英文を覚えることに力を入れている生徒がいた。準備した絵や図などを使って、即興的に英語で話そうとする力を育てるように帯活動などで英語でのやりとりを継続したい。そして、学年が上がったときに既有知識を活用し英語で表現できるように指導を積み重ねていく。

また、英語で説明を作成する際、お互いにアドバイスすることができていたグループもあったが、より正確さを高めることができればと思う。特に、代名詞の使用があまりされていなかった。生徒同士の対話によって気づきを引き起こす足場かけについても引き続き模索したい。

パフォーマンステスト

スキット発表はパフォーマンス課題と位置づけ、生徒がどのような力がついたかを示すルーブリックを用いたパフォーマンス評価を行った。この授業では評価は自己評価と教員の評価であったが、他のプログラムでは自己評価に加え2人のクラスメートからも評価をもらえる活動を行った。パフォーマンステストの前に生徒相互に学びあえる機会をこれからも多く設け、パフォーマンスの質がさらに上げる工夫をしていきたい。

2 2 学年実践事例

本単元では、環境問題や貧困問題といった世界規模の問題を自分ごととして捉え、自分の生き方を考えるように促すことをねらいとしている。最終的には、英文構成を意識し、自分の考えを論理的でまとまりのある文で表現する授業実践を試みた。

(1) 主題 Program 7

If You Wish to See a Change?

(SUNSHINE ENGLISH COURSE 2 開隆堂)

(2) 目標

知識構成型ジグソー法を通して、対話的な学びの中から、自分にできる行動(将来の生き方)への考えを深め、まとまりのある文で具体的に表現することができる。

(3) 本実践の目的

本単元で育成したい資質・能力「自分の考えを、まとまりのある文で表現する力」の育成を目指す。知識構成型ジグソー法を通して、対話的な学びの中から自分

にできる行動への考えを深め、まとまりのある文で具体的に表現できることを目標とし、単元計画を立てた(表4)。

表4 単元計画

単元を貫くゴール Big Question	
「私が果たす責任とは? ROR: Recognition of Responsibility」	
	学習内容及び思考を誘う問いかけ Can-Do
第1時	イントロダクション～スピーチ映像～
第2時～ 第4時	文法事項の導入及び活用
第5時～ 第7時	ジグソーリーディング～内容理解～ 事前活動: 1st draft&エキスパート活動①
第8時 (本時)	エキスパート②⇒ジグソー活動(話し合い) ⇒クロストーク①
第8時～ 第9時	クロストーク②&事後活動: Final draft
この後	A L Tへのプレゼン 「キーワードを頼りにセヴァンさんのようなスピーチをしよう!」

(4) 実践内容

① Big Question

Big Question 「私が果たす責任とは? ROR: Recognition of Responsibility」に対する解を、仲間と話し合い、思考しながら考えていくために、知識構成型ジグソー法による学習を2時間配当した。

本時の最後に生徒が上記の課題に対して、話せるようになってほしい期待する解は次の通りである。

期待する解:

I must change myself.

First, I should think about recycling. Because it makes our wonderful future. For example, we can sell used chairs and tables. If we start to recycle, we can reduce garbage. We should start protecting the earth.

Second, I should think about poor children. Every child has to go to school. I must think of children in Africa when I buy some chocolate. I must learn about the problem. And, we have to act from now!

その際、質の高いコミュニケーションのポイントは次の通りである。

Aの要素:

- ①まとまりのある文で40words以上の量で表現している。
- ②論理的な構成である。
- ③自分の考えが入っている。
- ④クラスメイトが聴いても分かりやすい内容である。

*40words程度の文章で構成しているが、上記の要素がほとんどない場合はB。

② エキスパート活動

ABCそれぞれの課題について、3～4名の班で話し合い、「何ができるか」というアイデアをそれぞれの

視点で考え、英語で表現するという課題に取り組んだ。エキスパート資料は以下の通りである。

<p><エキスパート A> ガーナのカカオ農園で働く子どもの英文を読む。「私は～できる」という視点で簡単な英文を書く。</p> <p><エキスパート B> ドイツの3R活動の取り組みに関する英文を読む。「もし自分が～すれば・・・」という視点で簡単な英文を書く。</p> <p><エキスパート C> 大きな変化に関する英文を読む。「何をやめて」「何を始める」べきか、という視点で簡単な英文を書く。</p>

エキスパート資料の作成においては、期待する解のAの要素に気づくように工夫した。

③ ジグソー活動

ジグソー活動では、エキスパート活動のグループとは違うメンバーで、グループを構成する。エキスパート活動の考えを統合して、論理的でまとまりのある英文構成になるように、話し合いを進めていく。その際、気持ちを表現するために、助動詞（can, should, must など）を意識して表現手段に取り入れることを期待した。

④ クロストーク

クロストークでは、グループで話し合った「私たちが果たす責任」についての英文と工夫点を発表し、クラス全体で交流を行った。各班が考えた Big Question への解を全体で交流することで、課題についての理解を深めた。

クロストーク後には、もう一度、各個人の「私が果たす責任」を見直して、自力で再構成する活動を取り入れた。

(5) 実践の考察

① 授業前後の変容（ワークシートから）

生徒の事前のスピーチ原稿と、ジグソー活動後の原稿を、ワークシートの記述をもとに比較する。以下は、3名の生徒の変容である（表5）。

表5 スピーチ原稿（授業前後）

生徒	授業前後の生徒の記述（原文ママ）
生徒 A	<p>【事前】 I must change my lifestyle. I have two ideas. First, I must stop taking a shower for a long time. If I use less water everyday, I can continue using valuable resources in the future. Second, I should buy only necessary things.</p>
	<p>【事後】</p>

生徒 B	<p>I must change myself. I have two ideas. First, I should buy a little expensive chocolate that the adults made. Because poor children in Gahna work at cacao farm all day for us. It is not good for them. Second, I have to try to reuse trash. It'll lead to less trash. Reducing trash is helpful for environment. These ideas are not difficult for me to do. I think that I'll have done these things, the world will becomes better place than now. 【工夫した点】 理由を付け加えて、分かりやすく工夫した。「これ本当にできるの?」というアイデアではなく、<u>自分に本当にできることを書きました。Easy & Simpleな行動が大事。</u></p>
	<p>【事前】 I must change myself. I have three ideas. I must stop buying many things. If I stop buying many things, world people will become change lifestyle. I send a lot of money. 【事後】 I must change myself. I have two ideas. First, I must stop buying too many things. If I stop buying too many things, the world's people will change their lifestyle. Second, we can send a lot of money to poor children. If we send a lot of money to poor children, they will have happy lifestyle. ◎We have to change the world. ◎We should help poor children. ◎We must change our lifestyles. 【工夫した点】 「First」「Second」などを利用して、文章で人々に伝える工夫ができた。<u>分かりやすく、まとめて書く工夫もできた。</u></p>
生徒 C	<p>【事前】 I must change myself. 【事後】 I must change myself. I can use eco-bag every day. And I should start saving my house using LED lights. I must stop watching TV for a long time. I have to stop wasting food. 【工夫した点】 <u>今から自分ができることを書いた。</u></p>

事前活動では、「募金する」や「ご飯を残さない」など、一般的な意見が多く見られ、自分の生活を少しでも工夫して変えるという視点をもった生徒が少なかった。また、文章構成や表現に関しての課題も多くの生徒に見られた。授業後には、評価B、Cの生徒も含め、全員が「何ができるのか」を、自分ごととして捉え、「自分に本当にできること」を工夫した点で挙げている。さらに、「理由を加えて、分かりやすく」や「First, Second を利用して」などを工夫点に挙げ、論理的でまとまりのある文を意識している。本授業のねらいでも

ある「自分の考えを、まとまりのある文で表現する力の育成」という視点では成果として捉えたい。

以下は、後日実施したパフォーマンステスト後の生徒の感想である。

- ・キーワードを頼りに覚えて話したので、アイコンタクトやジェスチャーまで考えを持って行くことができたので、より伝えられたと思う。
- ・スピーチはシナリオがあるから、スラスラ言えたけど、質問の受け答えはその場で考えて文にしないといけないので、さらに頑張ろうと思った。
- ・ただスピーチするのではなく、しっかりと考えが伝わるように声の強弱やアイコンタクトを意識することを工夫しました。
- ・自分が伝えたいことがちゃんと伝わるような文構成を意識した。しっかりと理由や根拠が言えたので良かった。

② 授業デザインの振り返り

事前活動で、1回目に原稿を書いた時のアンケート（選択肢 ABC）では、「構成を考えて具体的にまとまりのある内容が書けていると思う」と30%の生徒が回答、「相手が理解できる内容や表現で書けていると思う」と55%の生徒が回答していた。語彙数も30words程度であった。本単元で育成したい資質・能力として「自分の考えを、まとまりのある文で表現する力」としている。そこで今回、各エキスパートで世界規模の問題を自分ごととして捉えるように課題を設定した。さらに、「相手（聞き手）を意識した」というポイントから、伝えたい「思い」、自分の気持ちを論理的でまとまりのある英文で表現するには、既習事項の助動詞を意識して使うという視点を生徒同士の学びの中に取り入れたと考えて、課題の設定を工夫した。

事後活動で、再度自力で原稿を再構成した際のアンケートでは、「構成を考えて具体的にまとまりのある内容が書けていると思う」と85%の生徒が回答、「相手が理解できる内容や表現で書けていると思う」と85%の生徒が回答している。語彙数も50words~70words程度に増え、「自分の考えをまとまりのある英文で表現する」ことに関しては、一定の成果があったと考える。さらに事後活動で行ったパフォーマンステストにおいては、キーワードを頼りに、自分の思いや考えを「伝えること」を意識したスピーチを心がけていた。さらに、スピーチの後の質問に対しても自分の考えを伝えることができていた。事前に提示した評価の観点（ループ

リック）の効果もあり、46%が満点、96%の生徒がA評価（8割達成）であった。50words程度のまとまりのある英文をスピーチパフォーマンスする活動は、初めてだったが、生徒の感想には達成感や自信につながったコメントが多数あった。「英語を話す」だけでなく、英語で「何を伝えるか」という質の高いコミュニケーションを意識した学習活動を今後も取り組んでいきたい。

③ 実践を踏まえた授業の改善点

対話の工夫

生徒同士の英語によるやりとりの場面を、授業の中でどう設けることができるのか、が課題としてあげられる。帯活動として即興で行うペアでのQ&Aを定期的に行っており、身近な話題（自分のことや日常のこと）に関しては、スムーズに対話ができるようになってきた。しかし、トピックが自分から離れた少し難しい話題になると、英語でのやりとりが難しく、日本語に頼りがちになっている現状がある。そこで、「深い学び」に至るための「対話」の工夫が、教師の適切な足場かけとして大事なポイントとなるはずである。生徒の「思考」を見取り、適切な「発問」を活動の間に入れていくことで、さらに「深い思考」へと繋がるかと考える。教師による足場かけをきっかけに、生徒同士の英語によるやりとりが前進する。教師による適切な発問と生徒同士の対話の繰り返し、両輪となって、英語による充実したやりとりの場面がさらに充実していくと考える。それができてこそ、「主体的・対話的で深い学び」が実現できる。

パフォーマンス課題

1単位時間を超えて深く考えた成果物をアウトプットしていくような課題設定が大切だと考える。パフォーマンス課題は、全ての生徒が自分のできる最大の英語力を駆使してアウトプット活動を「主体的」に行うものである。そのためには、思考力の育成が不可欠となる。パフォーマンス課題に取り組む過程ではぐくんだ思考力は、英語科が目指す「質の高いコミュニケーション能力の育成」に繋がるだろう。その際、教室空間においては、「間違いを楽しむ」「間違っても大丈夫」という支持的風土を大切にしていきたい。さらに、できた成果物を評価するだけではなく、学びの過程に視点をおいた評価の工夫を考えていきたい。

3 3 学年実践事例

本単元では Program 7 の発展学習として、英文内容やそこに含まれるメッセージ等を読み取り、仲間と意見を交流しながら自分の考えを英語でまとめていく授業実践を試みた。

(1) 主題 Program 7

What Is the Most Important Thing to You?

(SUNSHINE ENGLISH COURSE 3 開隆堂)

(2) 目標

- ・まとまりのある英文を読解することができる。
- ・まとまりのある英文を読んで、感じたことや考えたことをまとまりのある英文にすることができる。
- ・関係代名詞（主格）の表現を正しく身につけ、運用することができる。

(3) 本実践の目的

これまで国際協力については、3Rs を含めたりサイクルや募金、環境問題などが題材として取り上げられ、身近な問題としてどう取り組めるのかを考えてきた。本単元においては、「子どもの視点」から国際協力を考えることを切り口とし、ジグソー法による学習を単元末に取り入れることで、より深く国際協力の必要性を実感させたいと考えた。

そこで、教科書の題材を6時間で進め、その中で学習した背景知識と言語材料をもとにジグソー法による発展学習を3時間設定した。そこでは「お絵かきイベント」の実際の例として、カンボジア・シエラレオネ・日本（岩手）を「宇宙船地球号」のホームページから拾い、それをエキスパートの資料として使用した。同じ子どもとしての「大切なもの」やその子どもたちを取り巻く環境について仲間と読みとり、そこから感じとったことや自分にできる国際協力についての意見を交流し、最終的には、普段の授業で行っている OREO writing の形式で、「自分にできる国際協力」について4文以上のまとまりの英文が書けることを目標とし、単元計画を立てた（表6）。

表6 単元計画

単元を貫くゴール Big Question 「What and how can we act to make the world a better place?」	
	学習内容及び思考を誘う問いかけ Can・Do
第1時	事前アンケート：「自分ができそうな／やっ

～ 6時	みたい国際貢献とは？」 教科書の本文内容、文法事項の学習
第7時 (前時)	エキスパート活動 「あなたにできる国際貢献とは?①」
第8時 (本時)	ジグソー活動～クロストーク 「あなたにできる国際協力とは?②」
第9時 (次時)	事後活動：クロストーク続き及び英文作成 「What is the meaningful international cooperation?」
この後	(中学校卒業までに) 社会問題への基盤形成

(4) 実践内容

① Big Question

Big Question 「What and how can we act to make the world a better place?」に対する解を、仲間と話し合い、思考しながら、考えていくために、知識構成型ジグソー法による学習を3時間配当した。

本時の最後に生徒が上記の課題に対して、話せるようになって欲しい期待する解は次の通りである。

期待する解：

(O)We should pay more attention to things in the world.

(R)Because we can learn some differences in the world through Mr. Yamamoto's project.

(E)I want to donate money to send textbooks to the people who can't go to school. I also want to send letters to the people in Iwate and make friends with them.

(O)I will check the Internet to know about the needs for each country.

② エキスパート活動

ジグソー法による学習を3時間配当し、1時間をエキスパート活動にあてた。課題を解決するための資料として、AからCの3つの視点を用意した。それぞれの資料には、情報元である山本敏晴氏のことばが含まれている。エキスパート資料は以下の通りである。

<エキスパートA>

- ・カンボジアの子どもたち4人が語る最も大切なもの／こと（自然・自分の家・ゴミ・学校）と本人が描いた絵
- ・自然破壊や物資に乏しい人々の現状についての山本氏のことば

<エキスパートB>

- ・シエラレオネの子どもたち4人が語る最も大切なもの／こと（平和な世の中・農業従事者・自然環境・医者等）と本人が描いた絵
- ・内戦による被害や自然破壊等、生活に困っている人々の現状についての山本氏のことば

<エキスパートC>

- ・日本（岩手）の子どもたち4人が語る最も大切なもの／もと（あきらめない心・前向きな考え・学校の友人・自然環境の保全）と本人が描いた絵
- ・東北大地震によって失われた家族や友人、家、自然環境等

についての山本氏のことば

生徒は男女混合3～4名のエキスパートグループに分かれ、仲間と協力して資料を読みとり、最後にそれぞれの国の人々のためにできる国際協力について英文を書く。教師は活動の進め方の指示と英文を書く際の手助けを行った。

③ ジグソー活動

本単元では、資料の課題の質と量をふまえ、エキスパート活動（発展学習①）とそれ以降の活動（発展学習②）を分けて行うこととした。ジグソー活動では、生徒はエキスパートABCの各メンバーが含まれた男女3人グループを編成し、情報の共有と感想や意見の交流、課題に対する各自のまとめを行った。エキスパート活動を踏まえて、ジグソー活動における課題「What meaningful international cooperation can you do?」に対する答えを、理由も含めて、OREOを使って4文以上の英文を記述させることとした。教師は、エキスパート活動の際と同様に進め方の指示や注意事項、英語でまとめる際の手助け等を行った。

④ クロストーク

クロストークでは、各自が書いた課題に対する考えを英語で発表し、クラス全体で意見の交流を行った。それぞれの生徒が発表した後には、ALTがその内容に関する質問を英語で行った。更に、他の生徒の意見を聞いて自分の意見が変わったり、付け加えたい場合には、色ペンなどを使って明記するように指示を与え、主体的な意見交流ができるように促した。クロストーク後には、「あなたができる国際協力」についてのアイデアを、SNSで山本敏晴さんに送ることを目的にして、理由を添えて英語で記述させた。

(5) 実践の考察

① 授業前後の変容（ワークシートから）

生徒の事前のアンケートに書かれた記述内容と、ジグソー活動後の記述内容を、ワークシートをもとに比較する。以下は、3名の生徒の変容である。

表7 記述内容の比較（授業前後）

生徒	授業前後の生徒の記述（原文ママ）
生徒A	【事前】 I want to help who were suffering from illness. Because I become kangoshi in the future. Many people help.
	【事後】

	<p>I should send letter with found raising. Because there are many poor children and many people who the hurt is broken in the world. For example, there are not enough schools, teachers and textbooks in Cambodia. So we think tell this situation to people and tell them to cooperation. This action is the first step to improve the situation. But I think understanding is more important than act.</p> <p>【学習後の変化について】 私はただ単に最初は国際協力といえば募金じゃない？という考えでしたが、様々な国の状況を知ることによって具体的に考えることができました。そういった行動ではなく理解することが改善の第一歩だと思います。</p>
生徒B	<p>【事前】 I want to go to Africa. Because, Africa has a lot of poor people. I want to help them. For example, I should volunteer work and give food.</p>
	<p>【事後】 These days, many countries have serious problems. So, I think we should learn about that countries. To learn that, we can be interested in that countries and act for them. If they suffer from hunger and illness, I can send food and medicine to them. If they are sad because they lost their friend by war or natural disaster, I can send letter for them. To sum it up, we can save them to act.</p> <p>【学習後の変化について】 私は、「国際協力」といえば、発展途上国の人たちや地球温暖化の影響を受けている国の人たちを助けることだと思っていたけど、学んでみて、岩手の人たちなど私たちの身近にいと知り、私たちが行動することで1人でも救われるのだと強く思いました。</p>
生徒C	<p>【事前】 I can fund raising to all over the world.</p>
	<p>【事後】 I going to learn developing country. Because, we can help children in developing country. There are not enough school, teachers and textbooks in developing country. I can donate money at stores. So, the money we can built schools, And we can give them textbooks. So I think learn developing country.</p> <p>【学習後の変化について】 最初は、募金をするだけでいいと考えていたけど、募金をしてそのお金で何をしてあげるかまで考えることが国際協力なのかなと思った。</p>

事前アンケートの時点では、生徒の事後の自己評価の中の「学習後の変化について」の記述の中にも見られるように、今回の課題であった「国際協力」に関する考え方の変化を大きくみることができた。生徒がこれまでの単元において考えてきた既存の知識などを活用しながら、「国際協力」という大きなテーマに対して、自分事として捉え、いまの自分たち出来ることを英語で表現することができていた。

質の高いコミュニケーション能力に関しては、相手意識をもった英語表現をするために、OREO writingの形式に当てはめながら、論理的で分かりやすい、まとまりのある英文を書くことができていた。

② 授業デザインの振り返り

今単元では、教科書での学習内容を踏まえた発展学習として、単元末にジグソー学習を取り入れることで、より深く「国際協力」の必要性を感じさせたいと考えた。深く考えるための単元構想という視点では、教科書本文の内容の読み取りの時点から、一人一人が精読を行い、山本敏晴さんが「お絵かきイベント」を通して何をしたかったかについて考えさせた。そこで読み取ったことを踏まえ、毎時間 Big Question である「あなたができる国際協力」についての考えを深めさせた。

「伝えたい内容」を英語で表すことの難しさが事前の想定では考えられたので、教科書本文の中に出てくるキーワード、キーセンテンスなどにも触れながら、ジグソー活動における、エキスパート資料やジグソー活動のワークシートも作成することを心掛けた。その結果、生徒たちは、教科書で学習した言語材料やキーワードなどを、自分の伝えたいことに合わせて使用する様子が見られた。

生徒の授業後の感想の中には、授業前の浅かった考えが、ジグソー学習、そして OREO writing を通して、具体的に考えることにつながったという記述が多く見られた。単元のねらいの1つである、「国際協力の必要性」への理解の深まりを示す記述であると捉えたい。

③ 実践を踏まえた授業の改善点

知識構成型ジグソー法→パフォーマンステスト

前述したように、教科書内容の発展的な扱いとして、ジグソー学習を単元末に設定した。山本敏晴さんの考えをさらに詳しく捉えなおし、自分の考え・行動を具体化させることができた点で良かったと考える。しかし、エキスパート資料における英文の読みとりに時間がかかっているグループがあり、十分に考えが深まらないまま、ジグソー活動に移っていたグループも見られた。またジグソー活動においても、自分以外のエキスパート資料の内容に触れずに、自分の考えを記述している生徒も見られた。生徒が自然に与えられた3つの資料を活用しながら、考えを深めることができるような工夫がさらに必要である。

課題に対する最終的な考えを、OREO writing の形

式に当てはめて書くことは、継続的な取り組みで多くの生徒ができるようになってきている。今後は、ジグソー法を通して深めたテーマについての考えを活かして、誰かに、意図をもって伝える課題を含んだパフォーマンステストの実施及び、思考のプロセスに着目しながら、生徒の思考の表現が解釈できるようなルーブリックの開発にも積極的に取り組んでいきたい。

VI 成果と課題

1 成果

今年度の研究は、前年度の課題を踏まえて、深く考えるための単元構想を含めた、アクティブ・ラーニングの視点での授業改善を図り、本校英語科の考える、質の高いコミュニケーション能力の育成を目指した授業実践を行った。

深く考えさせるための単元構想においては、目的を明確にした対話活動を取り入れる中で、「情報獲得を促す対話」を普段の授業で行い、「考えを広げ深める対話」についてはジグソー学習を取り入れた授業づくりを行った。

その結果、それぞれの学年において、「単元を貫いたゴール Big Question」に向かって、単元全体を通してインプットを積み上げ、単元末で行ったジグソー学習で得たことなどを生かして、パフォーマンステストにおけるアウトプットにつなげることができた。

今後も、生徒が習得した概念（知識）や考え方を実際に活用しながら、内容のつながりを意識して、自分の考えや気持ちを、場面や状況にふさわしい表現を用いて伝えることができる生徒の育成を目指して、研究を進めていきたい。

2 課題

1・2年次の研究では、生徒が深く考えるためのアクティブ・ラーニングの実践において、「目的を明確にした対話活動」を促す中で、本校英語科の目指す生徒像につながるような、質の高いコミュニケーション能力の育成を図った。

対話活動を取り入れていく中で、生徒同士の英語によるやりとりの場面設定が課題として挙げられた。生徒による「思考」をみとり、教師による適切な「発問」を活動の中に入れていくことで、さらに対話を充実させ、

その中で、生徒同士による気づきを引き出していく工夫が必要である。

今後は、深く考えた結果外化された成果物を評価するだけではなく、思考過程に視点を置いた評価を考えていきたい。内容だけでなく思考過程にも重きを置いて解釈することで、英語科のパフォーマンス評価でも、単語や文法事項の正確さのチェックだけでなく、それらに少し誤りがあっても、自分の本当に伝えたいことを伝えようとしているか、というプロセスに重きをおいた評価も可能になる。

また、パフォーマンステストの際に提示するルーブリックにおいて、本校英語科の目指している「質の高いコミュニケーション能力」(場面や相手との関係を理解して適切に表現できる力を身に付け、他者とのより良い関係を築いていく力)⁵⁾とはどのようなもので、それを確認できるような評価基準の作成についてさらなる研究をしていきたい。

料集(第2集)』、京都大学大学院教育研究科、2017年

・石井英真『今求められる学力と学びとは』、日本標準、2015年

引用文献・参考文献

- (1)中央教育審議会『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申)』(平成28年12月21日)、p.26
 - (2)前掲(1)、p.200
 - (3)琉球大学教育学部附属中学校『研究紀要』第29集、2017年、p.105
 - (4)田中博之『アクティブ・ラーニング 深い学び実践の手引き』、教育開発研究所、2017年、pp.28-31
 - (5)前掲(3)、p.106
- ・上山晋平『英語教師のためのアクティブ・ラーニングガイドブック』、明治図書、2016年
 - ・山本崇雄『使えるフレーズ満載! All English でできるアクティブ・ラーニングの英語授業』、岳陽書房、2016年
 - ・澤井陽介『授業の見方「主体的・対話的で深い学び」の授業改善』、東洋館出版社、2017年
 - ・西岡加名恵『「資質・能力」を育てるパフォーマンス評価 アクティブ・ラーニングをどう充実させるか』、明治図書、2016年
 - ・西岡加名恵他『E.FORUM 共同研究プロジェクト【プロジェクトS】「スタンダード作り」基礎資